アメリカ人大学生のアジア留学事情
――『高等教育クロニクル』の記事より――

宮　田　　実（訳）

“Americans Shy Away From Study in Asia”
―― An Article from *The Chronicle of Higher Education* ――

Translated by MIYATA Minoru

アメリカとアジアの教育交流

中国，インドをはじめとするアジアの国々の世界的な影響力が強まるにつれアメリカの政治・経済界のリーダーたちはアジアに関心を持つようになった。しかし，そのような関心は留学生数には反映されていない。外国へ留学するアメリカの大学生のうちアジアへ行くのは11％にすぎない。人気があるのはヨーロッパでその割合は50％を超える。

ニューヨーク大学が実施している上海留学の責任者である石氏は次のように述べる。「ある意味でメディアは一般のアメリカ人をアジアに目を向けさせるのに貢献しています。しかし，大学，特に学部レベルではこの点において努力が全くたりません。」石氏や他の国際交流担当者たちは，アジアへの留学生が少ない理由として高いハードルが数多くあると指摘する。第一に，アメリカの大学生でアジアの言語を学ぶ者は極めて少ないことが挙げられる。また，アジアの言語に堪能な学生はさらに少ない。したがって多くのアメリカ人大学生にとってアジアはなじみの薄い地域であり，行くのが少し怖い地域でもある。第二に，アメリカの大学教員にはヨーロッパに知己を持つ者が多く，学生をその方面に目を向けさせる傾向がある。第三に，アジアの大学の多くが内向きで，外国からの学生を迎えるよりも自国の学生の教育に力を入れる傾向がある。

しかし，アメリカにはかなりの数の学生をアジアへ送っている大学がいくつかある。こ

平成22年６月28日　原稿受理
大阪産業大学　教養部

れらの大学はアジアと深い絆を持っていることが多い。例えば，ニューヨーク州立大学バッファロー校（以下，バッファロー校と表記する）は1980年に初めて中国の大学と交流を開始した。米中が外交関係を再開して１年後のことであった。また，イェール大学と中国との交流は1世紀以上前にさかのぼる。両大学とも外国へ留学または研修を受ける者の約４分の１がアジアを選択している。

最近，アジアに対する教育面での関心が高まっている兆しが見られる。アジアの言語，特に中国語を学ぶアメリカ人の数は増えている。しかも，若年層にその傾向が見られる。最近５年間でアジアへ留学するアメリカ人は200％増加した。オバマ大統領は中国への留学生の大幅な増加を奨励している。専門家は，アメリカの大学がアジアの大学とより強固な関係を築き，教員を巻き込み，カリキュラムに外国での学習を取り入れればアメリカとアジアの教育交流がますます盛んになると指摘する。同時に，アジアの大学は短期の留学プログラムや英語による授業を提供するなど，アメリカ人が来やすい環境を作る必要がある。国際教育研究所のブルーメンタルさんは次のように述べる。「アメリカから押し進める要素とアジアからの引き寄せる要素がありその両方が必要なのです。」

重要な教員の役割

アジアへの留学を促進するためには大学教員の存在が鍵となる。最近発表されたレポート「アジアやオーストラリアの大学とのより緊密で永続的な関係を求めて」によれば，大学教員がアジアの大学についてよく知らなくて教育の質についても不安があれば，彼らはアジアの大学が認定した単位を認めようとしない。また，外国留学を勧める場合，研究仲間が多くいてカリキュラムもよく知っているヨーロッパ諸国の大学に偏ってしまう。このレポートは昨春実施された国際教育交流協議会の会議を受けて発表されたものであり，この会議にはアメリカ，中国を始めとするアジア太平洋地域の国際教育の専門家が参加した。

この会議を企画したアンダーソンさんによれば，彼女が勤務するカリフォルニア大学サンディエゴ校（以下，サンディエゴ校と表記する）ではアジア留学の障壁を取り除くために教員，特に理工学分野の教員と協力して，アジアの大学で提供されている講座でアメリカで学習したことを補完するようなものを紹介している。また，教員対象のアジアの大学訪問ツアーを企画している。サンディエゴ校で国際教育部長を務めるアンダーソンさんはさらに次のように述べる。「同時にアジアの大学もオンラインでシラバスを提供したり，学習内容や教科書に関する情報をアメリカの大学と共有することによって協力関係を強化することができます。」

シンガポールにあるナンヤン工科大学の国際関係部長で国際教育交流協議会の会議に参

加したリム氏は，アメリカの大学は教員が研究，フィールドワーク，教育をアジアで実施するように仕向けるべきだと言う。氏によれば国際経験豊かな教員は外国留学に協力的であり，永続的な留学のサイクルを作る力となる。

バッファロー校では教員の尽力によりアジアへの留学を充実させてきた。同校が提供するプログラムの約半数はアジアで実施されており，そのほとんどは短期で教員の研究協力関係から実現したものでその教員が引率を担当する。このような留学プログラムを発展させるために協力する教員に対して財政的支援がなされている。

バッファロー校の医学部教員と北京の首都医科大学の教員との間に長年続いている提携関係によりバッファロー校の学生は北京で中国人医師の回診に同行し学ぶことができる。教員が引率するプログラムの中にはタイで法律制度が文化によって受ける影響を学ぶものもある。平和部隊のボランティアの経験があるエンゲル法学部教授はタイ語の教員である妻と共に仲間の教員が外国留学プログラムについて話していた時にタイでのプログラムを考えついた。

バッファロー校のトマス経営学部教授は９年前から学生を中国に引率している。彼は経営学部のための中国研修プログラムを企画する際に，1980年代半ばに大連工科大学と共同で実施した中国のMBA（経営学修士）プログラムの教員としての経験を生かした。彼は中国の研究仲間や天安門事件以来中止されているMBAプログラムの卒業生の協力を得て，普通の研修プログラムではできないような会社見学や会社の概況説明を研修プログラムに取り込んでいる。トマス氏は次のように言う。「私達は長年にわたって教員間の強い絆を築いてきました。同じ遺伝子を共有しているようなものです。」昨年12月にトマス教授と中国研修に参加した経営学修士課程２年生のモーニンさんはこの研修を通して，これまで将来のキャリアプランにはなかった国際プログラムマネジメントに対する関心が高まったと言う。

増加する中国への留学

モーニンさんの例はややまれなケースである。外国留学の経験がほとんどない学生の留学が増えるにつれ，なじみの薄いアジアを避ける傾向があるように思われる。国際教育交流協議会と全米公立大学･土地付与大学協会のプロジェクト（外国留学と能力開発）のリーダーであるハイゼルさんはこう述べる。「アジアへ行くのはイングランドへ行くより勇気のいることなのです。」実際，国際教育交流の担当者によれば，アジアに留学する学生の多くはその国を訪れた経験があり，その国の文化を知り，その国の言語を話せるアジア系アメリカ人なのである。ニューヨーク大学の石氏によれば，彼が担当している中国研修に

参加する学生の半数はアジア系である。一方，サンディエゴ校ではアジアに留学する学生のほとんどすべてがアジア系の学生である。もちろんアジアに留学するのはアジアの文化的遺産を受け継ぐ学生だけではない。アジアで学ぶアジア系以外のアメリカ人学生たちは留学先で長期間滞在する傾向がある。バッファロー校３年生のモリソン君は大学が提供する半期または１年の外国留学プログラムを利用して東京の国際基督教大学で日本語を学んでいる。日本人家庭でホームステイをしているモリソン君はこう述べる。「日本でとてもすばらしい経験をしています。今まで見たことがないようなものを食べました。東京を始めいろんなところへ行きましたし，カラオケではかなりお金を使いました。」

アジアの言語を学ぶアメリカ人は増加している。モリソン君のようにアジアへ留学する学生は今後増えるだろう。バッファロー校で人気のある外国語第５位までに中国語，日本語，朝鮮語が入っている。それでもアジアへ留学する学生の多くはモーニンさんのように外国は初めてという人たちである。モーニンさんこう語る。「中国行きは私にとっては少し冒険でした。居心地が悪いと感じることもありましたが，世界に目を向けさせてくれました。」

困難な点があることを考慮しつつアメリカの大学は，訪れる国の言語や文化をよく知らない学生のために様々なプログラムを提供している。アジアへ向かう学生の中には将来の職業との関連で行く者も多い。例えば香港で世界の財政を学ぶ者，インドで伝染病の研究をしたい者もいる。

イェール大学は一学期間の北京大学での研修プログラムを提供している。そこで学生たちはイェール大学の教員による授業を英語で受け，中国人家庭でホームステイする。

外国留学プログラムを提供する非営利組織であるグローバル教育連合は中国で５つのプログラムを提供している。その内容は中国語の学習と国際ビジネス，政治，文化，芸術，歴史の学習を組み合わせたものである。このプログラムに参加する学生の約30％は中国語の初学者である。

アジアの大学では外国人学生を受け入れるために英語によるプログラムを提供するところが増えている。サンディエゴ校のアンダーソンさんは，このようなプログラムはヨーロッパでは一般的であるがアジアではもっと増やす必要があり，さらに学生のニーズに合った多彩なプログラムを英語で提供することが重要だと指摘する。一橋大学国際教育センターの太田教授は，英語による授業を開発するのは容易なことではないと言う。アメリカやカナダからの学生を増やすために一橋大学は最近，英語による40コースと日本語による20クラスを組み合わせたプログラムを開発した。太田教授はこう述べる。「われわれは変革しようとしていますが，新任教員を採用したりアメリカ人の学習スタイルに合わせなければ

ならず簡単にはいきません。」

アジア諸国の課題と展望

大学によって，国によってアメリカ人学生が適応しやすいところがある。英語が通じるインドはアメリカ人には行きやすい国だと思われるが，留学生数は比較的少なく，2007－8年度アメリカ人留学生は3,146人で中国の13,165人に遠く及ばない。インドの不透明な官僚主義や閉鎖的な態度が学生交流や国際協力を難しくしてきたと思われる。またインドの大学にはアメリカ人学生が期待する寮設備や学生サービスなどのインフラが不足している。さらに国際教育研究所のブルーメンタルさんによれば，インドの大学は外国人留学生は言うまでもなく国内の学生の要求にさえ十分応えることができていないのである。この結果，多くの学生をアジアに送り出している大学においてもインドへ行く学生は少ない。バッファロー校のダネット副学長は「インドの大学の多くは多数のアメリカ人学部学生を受け入れるよりは教員間の研究協力協定を結ぶことに関心があります。アメリカ人学生は時にはとても手がかかる存在だと思われています」と指摘する。

それでも留学生を増やそうとするアジアの国々がある。少子化に悩む日本や韓国の大学は留学生で学生数を補おうとしている。一方，英語で講義が行われているシンガポールでは知識と革新の中心的な存在としての地位を確立するために外国から優秀な人材を惹きつけたいと考える。中国は奨学金を提供したりして留学生を積極的に受け入れてきた。また中国は中国の言語と文化を広めるために外国の大学に多くの孔子学院を設立している。ダネット氏は「すべての中国の大学は留学生を獲得するために外国にオフィスを構えています」と言う。

これらの国々の大学が教員養成，インフラの整備，研究のためにより一層投資をすればアメリカ人の学生のみならず教員にとっても魅力的な存在となるだろう。バッファロー校のトマス教授は「この大きな投資には時間と根気が必要です。ただ単に大学を選んで，そこへ出かけて，うまくいくことを期待するというわけにはいかないのです」と述べる。

（2010年３月19日号）

（Copyright 2010. *The Chronicle of Higher Education.* Translated and reprinted with permission.）

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はカーリン・フィッシャーさんである。

今回のテーマはアメリカ人大学生の外国留学である。アメリカは世界最大の留学生受入国として知られているが外国留学する学生も年々増加している。国際教育研究所の最新の調査『オープンドアーズ2009』によれば，2007-08年度外国留学したアメリカ人学生の数は262,416人で前年比8.5％増であった。滞在期間による内訳は２～８週間が56.3％，半年が39.5％，１年が4.2％である。最多受入国は英国で33,333人（前年比1.9％増），その後イタリア，スペイン，フランスと続き，第５位が中国で13,165人（前年比19％増）である。アジアで２番目は日本（11位）で5,710人（前年比14％増）である。３番目はインド（17位）で3,146人（前年比20％増）である。アジア諸国への関心の高まりが読み取れる。特に，今後とも経済の発展が見込まれる中国への関心は益々高まるだろう。

本稿では主として中国への留学が取り上げられているが日本の大学の取り組みも一部紹介されている。現在日本の多くの大学で国際化が進んでおり，今後アジアのみならず世界中の国々からの留学生の増加を期待したい。